

2002年、第30回国際農業機械展が帯広の南東にある北愛国交流広場で開催された。8月23日から十勝に入り、知人宅を訪問して翌日訪れることになる農業機械展に心を弾ませていたのだが……。

当時、私にはその機械展に行かなければならない理由があった。父の代に作った麦と大豆の乾燥場が古くなり更新時期を迎えていたのだ。農場には定置式のものもあったが麦の乾燥には対応できなかったため、国産の一般的な60石や80石の乾燥機を考えていた。

会場に着くとお目当ての乾燥機が所狭しと展示され、なかでも300石（45t、実稼働36t）のシズオカが販売する乾燥機のパンフレットが目に入った。これからはこんなグレートでなくちゃ、と思いつつ担当者に聞いてみたが、なんと「この乾燥機は売り物ではありません」とつれない対応が返ってきた。なぜ売る気のないモノをパンフレットに載せているのか、「だったら買わないよ」くらいのつもりでいた。

魅力的な 台湾製の大型乾燥機

来季の乾燥場工事を考えると年末までには概要を決めなければならぬ。そんな折、当時隣町で小麦15

0haの勝部さんから太陽という台湾製300石の乾燥機の見積もりを見せられた。価格は破格で、300石のキャバを魅力的に感じた。

人の縁とは思えないもので12月に入って、十勝・本別町の若き貴公子の名声を欲しいままにする前田茂雄さんとの電話で「ミヤイさん台湾に遊びに行きませんか？」となった。なんでもアイオワ州立大学時代の学友ジェイソン君からお誘いを受けている様子だ。

ちよつと待てよ、台湾って？ 勝部さんが購入を考えていたのも確か台湾製だったことを思い出した。驚いたことに前田さんが使っている200石の乾燥機も元を辿れば台湾・太陽のライバル会社の三久（サンキユウ）という会社のものだという。

こうなると話は早い。クリスマスをめがけて台湾の乾燥機メーカー廻りの計画を練ったが、どうしても気になることがあった。いくら価格が安いといっても予備の部品を買ったところで、コメには使えるだろうか

この300石の乾燥機は
売り物ではありません……

Vol.68



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

麦にはどう対応できるのか不安が残った。

できることであれば緊急時に国内で対応できるメーカーのほうがいい。そこで一度断られたが、200石の三久を取り扱っているシズオカ札幌営業所の工所長と再度コンタクトを取ることにした。「生産者が集まってライバル会社の台湾の太陽という会社に行くことになったんだけど、三久製の300石は本当に売らな

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

「いんだね?」と話すと、I所長は「是非とも台中にある三久の工場も見てきてください♥」と自立型環境適応性抜群のビジネススマンに豹変した。

シズオカの関係者や私、勝部さん、前田さんなど総勢8名で12月22日から2泊3日の台湾ツアーが執行された。事前に関係者には接待無用!と伝えたが、現地では中華のフルコースである満漢全席とまではいかなかった。イヤラシくない丁寧な「おもて、な、し」を受けることになった。台中にある三久の工場では近代的な設備の中で製作される乾燥機に驚いた。その時に理解したのだが、**3000石のベースは1500石の乾燥機**で、枠を積み足し200石、2500石、3000石となるようだ。ありがたいことにシズオカが国内で販売するときは**電子機器やモーターは日本製に変えて**サービステル向上を目指している。

視察は色々な意味で勉強になった。日本ではコメの乾燥機は生産者自らが所有して、ある一定の水分まで落として出荷するが、台湾では事情が少し違う。集荷業者が乾燥機を所有して、生産者はその施設まで運ぶだけだという。よって集荷業者の乾燥施設は巨大である。3000石が数十台も設置されている光景はまさしく世界基準である。こっそり施設

のオペレーターに聞いてみた。

「何年耐用可能三久乾燥機?」

「これまた驚きの答えが返ってきた。年間250日動いて10年選手のものもある。ちなみに私の農場の乾燥機の稼働は5日/年である。ということは何百年使えるのだろうか?」

視察中に、ちょっと離れたところから、年の頃は80歳を過ぎたであろう老人がじっと我々を見ていた。帰り際に施設の片隅にあった台湾版の神棚が目に入ったので、近づき一礼をして帰ろうとした時に、先ほどの老人から激みない日本語で「あんたたちはどこから来たんだい?」と聞かれた。「北海道です」と答えると、「懐かしいな、私は戦争中、苦小牧にいてネジを作る工場にいたんだ」と会話が弾んだ。以前にも韓国で似たような経験をしたので、視察中は軽率な発言には気を付けていた。後から聞くと、このご老人はこの施設の元経営者だと説明があった。

こんな話もあった。ガイドはこの集荷施設の経営者であったが、ご息は過去に2回ほど誘拐事件などのトラブルに遭遇していたそうだ。20歳になった時にライバル会社の集荷業者の娘を嫁にもらうことになり、その後、一切のトラブルがなくなつたという。台湾版の政略結婚人質作戦大成功といったところなのか。

帰国後、3000石乾燥機が合計で20台の契約となった。**10年経った今でも故障知らずで、働いてくれていることに感謝**できるのも三久の林栄郎社長の人柄なのだろう。あの3・11の震災でメールをいち早く送っていただいたのはあの林社長である。同じ時刻にメールがもう一つ届いた。それはあの鶴のマークで有名な航空会社からの定型文ではない手入力での社員ご紹介JA●

カードの申込案内だった。もちろんその2時間前であった震災のことは何も書かれていない。日の丸を背負った会社と、もしかして反日になつていたかもしれない親日の国、台湾の会社の対応の違いに驚かされる。台湾滞在中に現地の20代の方たちと話す機会があり、私は日本という国を信用しているかどうかを聞いてみた。彼ら、彼女たちは戦争中にはいろいろあったようだが、社会資本を作ってくれた日本に感謝するとともに戦後は追いつけ、追い越せと親たちから教育を受けたそうだ。

その時は疑っていたが、3・11の震災では200億円を超える義援金と救助隊をいち早く送っていただいた台湾にすべての日本人は多大感謝する。日本人よ、もし台湾に有事が発生した時に義勇団を結成して、馳せ参じるくらいの器量があっても良いだろう。ちなみにこの三久の林社長は個人として最高額の1ミリオン・ドルを献金した方でもある。帰国してから台湾の歴史を調べてみた。日本の戦国時代後期にポルトガル人がやって来たのは、誰でもご存知のはずだ。その後オランダ人がやって来て、出島などの限られた場所からではあるが金髪・ブルーアイ文化が発信された時期でもある。同じ頃、オランダ人は台湾を占領・統治していたのである。

なぜ台湾は占領され、日本はされなかったのか? この時から大東亜戦争の序曲としての歴史の歯車は回りだしていたのだろうか。ウイキペディアによればその統治があつて台湾にヨーロッパの価値観が植えつけられたとある。確かその頃の朝鮮半島は清の国の影響力が強かったはずだ。これじゃ両国を50年間日本が統治していたとしても、そのバックグラウンドが違いすぎますね。

そして同胞だった台湾も巻き込んだ大戦が終結し、巢鴨プリズンで7名の戦犯が絞首刑に執行されたのは、なぜ現在の天皇誕生日である昭和23年12月23日だったのか考えてもいいだろう。米国は勝者の論理を教えてくれた。GHQ主導の農政を含む歴史的検証をする時がもうすぐやってくる。